



TITLE:

<センター新刊書紹介>棚瀬襄爾著,
『他界観念の原始形態-オセアニア
を中心として』, 東南アジア研究双
書 I, 1966,959p

AUTHOR(S):

口羽, 益生

CITATION:

口羽, 益生. <センター新刊書紹介>棚瀬襄爾著, 『他界観念の原始形態-オセアニアを中心として』, 東南アジア研究双書 I, 1966,959p. 東南アジア研究 1966, 4(3): 621-622

ISSUE DATE:

1966-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55239>

RIGHT:

センター新刊書紹介

棚瀬襄爾著『他界観念の原始形態—オセアニアを中心として』東南アジア研究双書Ⅰ；1966. 959 p.

従来の未開民族の宗教の研究の中で、最も力が注がれた分野は、神観念の問題であった。宗教的行為の対象としての神観念の性格の理解は、宗教の体系自体を理解する上に重要であるからであるが、同様に宗教の重要な表象であり、しかも多様な形態を持つ死後の世界の観念、即ち、他界観念は神観念ほどに注目されなかった。それには、少なくとも二つの理由が挙げられよう。第1には、文字を持たない未開民族の宗教の時間的前後関係を決定する基準、即ち、研究方法の問題が十分解決されていなかったからであり、第2に、多様な死後世界の観念を形態的に整序して、その時間的新古の問題を論ずるには、かなり広範囲の地域から多くの資料を比較検討しなければならないという労力の問題があるからである。

その点、棚瀬博士の他界観念の研究は、二重の意味を持つ労作である。一方において、民族宗教の多様な他界観念の形態と歴史的な前後関係にまつわる諸問題に解決を与えることによって、民族宗教の理解を深め他方において、民族宗教の歴史的研究の方法に反省と明確な方向を与えている。本書の対象とする地域がオーストラリア、メラネシア、ニューギニア、ポリネシア、東インド諸島という広範な地域にわたるのも、そうした研究対象と目的の性格によるものである。

本書の内容は主に四つの部分から構成されている。第1は、従来の他界観念論の批判的紹介としての序論である。次いで、収集された資料が、主に地域、形態の観点から整理記述されている前篇と他界観念の形態の分析と問題点の吟味を中心にした後篇が本書の大部分を占めている。最後の結語では、内容の要約と研究の方法論的反省が略述されている。以下本書の論点を略述してみよう。

従来の未開民族の他界観念の歴史的研究の代表的なものとして、博士は、E. B. Tylor, H. Spencer, W.

Wundt による研究を挙げる。例えば、Tylor は他界の形態を、その在処によって、地上、西方、地下、日月、天の五つに区分し、更に、それを地上、地下と天上の三者に要約する。そしてそこに他界観念の発展段階を認める。しかも、この発展段階は、他界の性格の変化と平行して進化する。未開な段階では、他界は現世からの継続された場所であるに対し、高度の発展段階では、他界は現世の償いや応報の場所である。

Spencer や Wundt の他界観念論の内容は、Tylor の場合とほぼ似ている。これらの他界観念論において、棚瀬博士が先ず問題にされるのはいずれの他界観念論も、神観念論ほどの精緻さに欠け、一貫した説明原理がなく、しかも実証に乏しい点である。更に何よりも研究の方法に問題点が多い。まず、他界の類似形態を束にすることによって、独立発生や歴史的伝播が無視され、他界の形態の新古決定の基準が西洋の価値にあって、はなはだ心理的、主観的で、歴史的ではない。このような方法の大前提は、文化発達の斉一性であるが、文化要素の環境に対する適応や歴史的伝播に基づく多様性が無視され、歴史的形態の実証的研究法としては適当な方法ではない。

Tylor などの進化主義的方法論に対して、博士が記録を持たない未開民族の歴史的研究方法として高く評価されるのは、F. Graebner や A. Ankermann, P.W. Schmidt などによる文化史的民族学の方法である。この方法論では、何よりも、文化要素の空間的相互関係の吟味から、文化要素の歴史的な前後関係決定の客観的基準が用いられている。即ち、文化要素の地域分布から基本形態と混合形態が類別され、前者は後者より古く、また地域的・周辺的に孤立した文化要素は、それを取りまいて普及している文化より古いという時間的関係の決定方法には、問題もないではないが、より客観的である。しかし、文化史的民族学のこのような方法による未開民族の歴史の再建でもまた自然環境への適応の軽視や伝播を重視する余り、地域的類似と文化要素の単純な共起結合によって設定され

た文化領域 (Gebiet) の独自性が見失われているため、再建された歴史が余りにも図式的となり、牧畜文化を極度に古いものとするような誤ちをおかしている。博士は、この方法では、文化要素の形態が重視されているので、物質文化の歴史の再建には適当であっても、精神文化に対してはどうであろうか、また残存する文化にも保守的なものと変化し易いものがある点に対する考慮が足りないのではなかろうかという疑問を提示しておられる。

しかし、いずれにしても、文化史的民族学の方法は、進化主義的な方法よりは、未開民族の歴史研究には優れているが、他界観念の研究においては、Schmidt の最原始民族の天の他界の研究しかまとまったものはない。

棚瀬博士は上記のような従来の研究方法の欠点を充分考慮に入れながら、しかも、地域的分布を通じて、時間的前後関係の判定の確実性を期するために、比較的明確に形態のとらえられない他界観念のより正確な分布を知る補助手段として、他界観念と密接な関連を持ち、形態の明瞭な弔葬儀礼の資料をも同時に収集し、分析の用具とされている。

以上の観点から収集された事例数は、他界観念で223、弔葬儀礼で292である。

これらの事例の分析を通じて、博士は未開民族の他界観念の歴史について、次のように立論される。

第1に、天の他界は東南アジアのネグリト諸族や東南オーストラリアの諸族に見られ、Schmidt の研究通り、最原始民族にのみ見られるものであるが、棚瀬博士は、Schmidt のような原始一神教と天の他界の元一起源説に反証をあげ、少なくとも採集経済の他界観念と弔葬儀礼は一元的でないとする。

第2に、地上の他界はメラネシアの中部以北と以西、ニューギニア西部および東インド諸島の大部分に分布し、山、火山、叢林や河畔、島の他界のように様々な形はあるが、いずれも埋葬と台上葬とに結合し、葬法の観点からすれば、同一種類の他界である。また地上の他界と分布上合致する習俗に首狩があり、この点についての理由や問題点が精緻に論証記述されている。進化主義的見解では、地上の他界は、最原始のものとされているが、それは、首狩や葬法の点からも、より進んだ文化段階の他界観念である。

第3に、地下界観念の主要な分布地域は、南部メラ

ネシアと東部ニューギニアである。この観念は、屈位の埋葬と内的頭蓋崇拜と決定的な関係があり、現実よりもやや理想化された世界であっても、決して地獄ではない。C. R. Moss によれば、南部メラネシアと東部ニューギニアの地下界は、類型を異にしたものであるが、博士は、葬法の観点からすれば、前者が本来のものであり、後者は樹上葬文化の影響による変形に過ぎないとする。

第4の西方の他界観念は、マライシアのセマンやサカイ諸族においても見られるが、いずれも外来信仰であり、また西方他界観念は民族移動の結果であるとする W. J. Perry のインドネシアに関する見解や C. R. Moss のオセアニアに関する見解に対して、博士は、アフリカやアメリカ・インディアン の事例をも援用して、西方他界観念には、民族移動によるものとそうでない超感覚的なものがあり、後者は、地下界信仰の民族と台上葬文化の混合から成立したと推論される。

第5に、最原始民族の天界とは異なって、天に階層のある天界の観念はポリネシアやマライ系諸族に見られるが、これは、インド的天界であり、シベリアの原始形態と系統を同じくするものと考えられる。また天上・地下の対置観念は、H. Spencer などの見解通り、文化混合の産物で、東南オーストラリアの最原始民族にも見られる。このような他界観念には、社会階級や倫理的行為によって、死後行くべき世界が定まるという思想が結合している点が論断されている。

最後に、博士は、靈魂観念と他界観念の関連について、靈魂観念もいくつかの系列に区分でき、他界観念は主に人格的に把握された靈魂観念に伴う観念であり、そうでない生命靈的観念力が純粹である場合には、他界観念の発達は見られないとする。

以上は、棚瀬博士の論述の概要であるが、本書では、その膨大な量の資料の精緻な分析から民族宗教の研究の未開拓な問題が未だ多く残されていることを随所に指摘されているばかりでなく、副産物として、首狩、呪術、魔術、呪術的治療法の形態に関する明快な論証がなされている。その意味で、民族宗教の実証的研究に対する功績は大きいばかりではなく、東南アジアをも含めた広義のオセアニアの未開民族の歴史的研究の資料として、また手懸りとして、きわめて貴重な研究であり、研究の方法論でも読者が受益する点は少なくない。(口羽益生)